

馬酔木の巻

毎年、13 人の仲間で作っていた木版画カレンダーの制作が終わったので、今年は「月々の花」をテーマとしたスマホ写真カレンダーを作ってみました。そして 1 月の花として選んだのが馬酔木(アシビ)の花でした。低山に自生していますが、庭木としても植えられるツツジ科の常緑低木で、どここの国でもありそうな花ですが、調べてみたところ「原産地は日本、中国、台湾」とありました。そして、学名が *Pieris japonica* で、「日本の」を意味する”japonica”が入ってくるのですが、これは、中国と台湾の学名決定権がまだ低かった時代に日本の当事者が強く推したからこそなのではないかと思われます。



馬酔木は、アシビの他にアセビ、アセボと呼ばれることがあります。古くから日本人に愛されてきた花で、万葉集にも 10 首ほど馬酔木を詠んだ歌があります。また、久しぶりに「馬酔木で一句」をお願いした即興俳人の高幡大馬王殿も、早速「歳時記」を調べて次のとおり、3 句の例句を紹介してくれました。いずれも、仏像や仏堂の傍らに咲いて様になるいかにも日本らしい花という気がしてきますね。学名を *Pieris japonica* としたのは大正解だったように思えます。

馬酔木咲く 金堂の扉に わが触れぬ (水原秋櫻子)

百済観音 背高におはし 花あしび (鈴鹿野風呂)

仏には ほとけの微笑 あしび咲く (飯野定子)

ところが、馬酔木の花言葉を調べてみると「あれれ？」という気がしてきました。馬酔木の花言葉は「犠牲」、「献身」、「あなたと二人で旅をしましょう」なのですが、これはギリシア神話に由来しているのだそうです。国を救うために怪物の生け贄になったけれど、英雄ペルセウスに救われてその妻になったエチオピアの王女アンドロメダに由来するものなののだとか。まるで”japonica”らしさがない話なので「日本人には”japonica”の花の花言葉をつける力もなかったのか」と少々口惜しく思われたのです。しかし、馬酔木に *Japanese andromeda* という英名があることから「アンドロメダはどんな花？」と調べてみたところ、ヒメシヤクナゲの属名で、日本の東北地方や北海道の野山に自生している花だということが分かりました。そして、「なーんだ、アンドロメダの花を見てヨーロッパの誰かさんが絶世の美女であったと言われる王女アンドロメダと直結させてしまっただけだったのかあ」と勝手に判断するようになりました。

そんな時インターネットにもう一つ別の”学名 japonica 版”ともいべき馬酔木の“身上調書”が見つかりました。右の写真入りで花言葉は「献身、純真な心」とあります。これぞ馬酔木、慎ましやかで可愛い釣鐘状の小花を見ていると心とまされますね。これなら花言葉が「献身、純真な心」でなくちゃと思われるのではないのでしょうか。冒頭に掲載した写真は馬酔木の紅色種である「曙馬酔木(アケボノアセビ)」と明記すべきだったかもしれませんね。



私が「月々の花」カレンダーの1月のページに馬酔木を“起用”した件についても、高幡大馬王殿は「『歳時記』には2-4月に咲く花」と書かれていましたよ」と教えてくれましたが、すぐに「でも、良いんじゃないですか」早春に咲く花“なんですか。前」を翻してくれました。いいですね、この即興俳人殿の柔らかな対応。テレビに出演されている著名な宗匠殿達、また、私たちの身の回りの似非宗匠達はみな「歳時記」の記述にあわない表現を見ると、「歳時記」を聖書の如くに振りかざして、「季語がない」とか「切れ字の使い方を誤っている」とか称して、読み手の心を全く無視して修正してくるのですから。私が「お正月だから明るい画像がいい」と思って「曙馬酔木(アケボノアセビ)」を1月のページに選んだのも、「2022/1 南足柄運動公園」というスマホに残っていたログに従ったものだったんですよ。

いずれにしても、この慎ましやかで可愛い花に「馬酔木」という場違いで無粋な漢字表現を用い続けてきた日本人の感性って、一体どうなんでしょうね。その昔、馬がもともと「あせび」という名の植物の葉や茎を食べて酔っぱらったようにフラフラになって動けなくなってしまうことからことわざのようですが、ある地域では、「しかくわず(鹿食わず)」と言っているそうですね。馬は食べてしまうけれど、野生の鹿は毒があると分かっているのだから、食べないのだそうです。気楽に鹿を馬と並び建てて「馬鹿」呼ばわりをするものではなさそうですね。ですから、「馬酔木は有毒植物の一種である」なんて説いても役に立つのは馬の飼い主しかいないように思えます。著名な俳句の宗匠殿たちよ、「歳時記」の権威を背に民を諭しているだけでなく、民の心に添うべく「歳時記」の記事を改定する方向にも動いてくださいよ。

即興俳人の高幡大馬王殿は、東芝でもともとOCR(Optical Character Reader:光学式文字取り機)の開発部門に所属していたエンジニアで定年を待たずに外国人相手の旅行ガイド業に転出した人物です。しかし、コロナ禍のため外国人観光客が大幅に減少したためさぞや元気をなくしているに違いないと心配しながら、「馬酔木で一句」のお電話をしたところ返ってきた声のなんと明るかったこと。やはり、日々、対人関係で心の通い合いを楽しんでいるからこそ明るさを保つことができているのだと思いました。外国人観光客数の回復も順調に進み、昨年末にはガイド業が立て続いて、そのうちの1回の際には、お客様を関西空港までお見送りした翌日、プライベートで、念願だった法隆寺と平等院に立ち寄ったとのこと。そして私の「馬酔木で一句」に心を通わせて、「法隆寺で国宝の百済観音にお会いして、その優美な立ち姿にほれほれした(馬酔木の香でぼーっとしたような感じ)ことを思い出し」次の2句を作って送ってくれました。

- ・ 百済観音 細き面立ち 花あしび 高幡大馬王
- ・ 細き御身体(み)に 天衣のカーブ 花あしび 高幡大馬王